

処刑されるはづが、目覚めたら
敵国の隻眼王子の妄愛に囚わっていました

プロローグ 犯罪で処刑されることになりました

どれだけあがいても、ちっぽけな自分が掴み取れるものは多くない。
たとえ王女という立場であつても、これまで何度も諦めてきたのだ。

——でも、まさか兄王子に^{おどし}陥れられる日が来るなんて。

「ライラリーネ・イオネル！ 国主^へ火宿り^{ひやど}」を弑^し逆したのは貴様だな！」

屈強な兵に両脇を固められ、身体を床に打ちつけられる。胸が潰れて、私は声にならない声を上げた。

「つ……！」

ここは宮殿の中央にある祈りの間。この國の王——国主^へ火宿り^{ひやど}のための謁見の間でもある。

この國で最も神聖とされている場所で、私は兵によつて地面に押しつけられていた。

裏地のないワンピースはボロボロで、両手首には枷^{かせ}。まるで見世物のように晒されて、皆の憎しみを一身に浴びている。

「言い逃れはできんぞ。証拠は拳がついている！ 国主の胸を突き刺したナイフ、貴様のものだつた

ろう？」

「仮に私が犯人だったとして、そんなあからさまな証拠を残すはずがないでしょう!?」

「黙れ！」

私がどれだけ否定しようと、兄王子は聞く耳を持たない。

これは、判決の決まつた一方的な裁判なのだろう。でも――

一日前の夜、自室に兄王子の私兵が押し寄せてきた。説もわからないままに捕らえられ、王であり養父でもある國主へ火宿りへ弑した罪に問われた。

それから二日、地下牢で腐った水だけを与えられ、ようやく連れ出されたと思ったら、この名ばかりの裁判に出頭させられたのだ。

一方的な裁判だつた。身に覚えのない証拠が出揃い、さらに召使いに侍女など、大勢の証人が現れた。きっと買収されたのだろう。皆日々に、私――イッジレリア国第七王女ラライリーネ・イオネルが國主の命を狙つていたと証言するのだ。もちろん、そんな事実はどこにもない。

(嵌められた……)

――そう。目の前の、兄王子によつて。

「カツシム兄様、これは冤罪よ！」

全て、目の前の男が仕掛けたことなのはわかつているのだ。

本来、國主が立つべき壇上に居座る場違ひな男、イッジレリア国第一王子カツシム・イオネル。私をずっと目の敵にしてきた彼の謀略なのだと。

「そのうるさい口、今すぐにでも縫いつけてやろうか？」

「きやつ！」

色素の薄い赤茶色の髪を後ろに撫でつけた兄王子カツシムは、踏みつけられる私を見下ろし、赤みがかった灰色の瞳をギラリと光らせた。

灼熱の砂漠が広がるイッジレリア特有の、白を基調とした正装。ゆつたりとしたズボンに、重ねた真紅の上着には金の装飾が細かく施されている。黄金の腕輪やチョーカーには最高級の赤の魔晶石がいくつも嵌め込まれていた。

なによりも目を惹くのは、頭上に輝く冠だ。國主以外が身につけることを許されない赤の魔晶石煌めく冠をかぶり、カツシムはふんぞり返つている。

本来ならば不敬罪で即刻首を刎ねられても文句は言えない所業。それが許されているのは、すでに彼がこの國の中枢を掌握しているからに他ならない。

赤の一族ともよばれるイッジレリアのイオネル王家に生まれながら、赤の女神の祝福が乏しいと言われる長兄カツシム。國主へ火宿りには遠いと言っていたはずの男だつた。

「よりもよつて、あのナイフを使うとはな。貴様を家族に迎える際、父上が贈つた物ではないか」

イッジレリア王家は皆、守り刀として國主へ火宿りからナイフを授かる慣習がある。そのナイフには個人の紋章と、赤の女神の祝福が込められているのだ。

「貴様の身を案じた上で贈り物だつたろうに、とんだ手のひら返しだ」

さも父親を憐むかのような態度で、とぼけたように呟く。トン、トン、と肘掛けを人差し指で叩

き、彼は忌々しげに表情を歪めた。

「拾われた恩を仇で返すとは。しょせん、貴様は下賤の血の流れる娘だつたということだ」「出自なんて関係ない！　私はやつていいない！」

ああ、枷が邪魔だ。身体が思うように動かない。でもジツとしていてはいけないことだけは、はつきりわかる。

（この首輪さえなければ、カツシムなんてどうとでもできるのに！）

魔力封じの首輪を嵌められた今の私は無力だ。王女という立場であつても、この肩書きに価値などないのだから。

（私の努力は、無駄だつたの？）

誰よりも強い祝福を授かり、国内随一の神子なんて呼ばれることもあつたけれど、たつた一夜にしてこの凋落ぶりだ。

部屋の四方には、世界の調和を保つ四柱の女神を模した彫像が置かれている。この情けない自分の姿を神々に見られていると思うと、胸がひどく痛んだ。

あのうちの一柱、赤の女神こそ、私に祝福を授けてくださった存在だ。

私は今まで、女神の祝福に恥じぬ行いをして生きてきたつもりだった。

だからこそ、こんな姿を見せるわけにはいかない。いわれのない罪を着せられ、黙つて受け入れるわけにはいかないのだ。

私は祝福の象徴とされる赤い髪を振り乱し、同じ色彩の瞳でキッと前を睨みつけた。

「簞奪者はあなたでしよう!?」

「無礼な！　控えろ！」

「きやあああ！」

兵にドンッ、と蹴り飛ばされた。鈍い金属音が室内に響き、身体が床に打ちつけられる。でも、これくらいの痛みでめげるつもりはない。

この男が頂点に立てば、国はますます貧しくなる。民を下賤なものと決めつけ、人を人と思わず酷使する……そんな男が国主になるなんて絶対に駄目だ。

でも、そんなカツシムだからこそ、私を毛嫌いするのだろう。底抜けの劣等感に反して自尊心は天井知らず。猜疑心が強く、陰湿で、私のことを目の敵にしてきた。

なにを訴えても無駄。そんなことはわかつてない。それでも。

地面上に転がりながらもキッとカツシムを睨みつけると、彼は忌々しいものを見るような目つきでこちらを見下ろしてきた。

「——まあいい。姦しいその口も、すぐになにも語れなくなる」

カツシムはゆつくりと立ち上がる。

「では、評決をとろうか」

彼が右手を掲げるなり、一堂に会した高位神官たちが声を上げた。

「有罪！」

「処刑だ！」

「この恐ろしい魔女め！」

「國主の座を狙つた、汚らわしい罪人が！」

「殺してしまえ！」

ぐわんぐわんと、私の有罪を決定づける声が響き渡る。

——違う。違うのに。

——私はやつてない。養父様を殺してなんかいない！

でも、この場所に引きずり出された時点で私の負けは確定していた。

二十一年間。慎ましく、目立たぬように、波風を立てないように、權力争いに巻き込まれないよう、それでも私は、私にできる精一杯のことをして、國に、王家に、仕えてきたのに。

(全部、全部無駄だった)

國主になりたいだなんて、ただの一度も思つたことはない。

何度もそう主張してきたのに、この赤の祝福を授かつた私を、カツシムが見逃すはずなかつた。

「ライラリーネ・イオネル。貴様を死刑に処する！」

どれだけ身を潜めて生きようと、赤の色彩を持つ私が目の前の簞奪者さんだつしやから逃れる術はない。

「——ああ、ようやくだ。目障りだつたんだ。平民出身の小娘が」

生まれてきた時点で、終わつていたのだ。

そうして一步、二歩とゆつくりと歩き、義理の兄だつたはずの男は私の頸に手を当てた。

「だが、その魔力をみすみす失うのは惜しい。せつかくだ。一滴残らず絞りとつてやろう」

「……っ！」

「喜べ。貴様はこのカツシム様の役に立つて死ねるのだ。——そうだ。あの憎きノルヴェン辺境王子ともども、死んでもらおうぞ」

両手両足首を縛られたまま、三日三晩の移動。

私は自爆の首輪を嵌められ、戦場にうち捨てられていた。

乾いた大地が広がる国境の平原。向こうに砂埃が巻き上がるのが見えた。

騎馬の大軍。率いるのは黒の辺境王子——ノルヴェン王国第二王子アーシュアルト・サヴィラ・ノルヴエンだ。あの軍人王子が国境を守つてゐるから、イッジレリア国は北へ領土を広げることができなかつた。大陸最強と噂される彼を、カツシムはずつと目の敵かたきにしていた。

私とアーシュアルト、邪魔な存在を同時に屠ることができるのだ。今頃カツシムはほくそ笑んでいるだろう。

(ごめんなさい、アーシュアルト殿下)

こんなことに巻き込んでしまつて。

国内隨一と言われる私の魔力。それを自爆の首輪で暴走させたら、大爆発が起つてゐるだろう。いくら無敗の辺境王子といえど、ひとたまりもない。

(ごめん、ごめんなさい……)

嫌だ。アーシュアルトだけでも助かつてほしい。

幼い日の記憶がチリ、と脳裏に蘇り、私は砂を摑む。いくら敵国の王子でも、彼を傷つけたくないなんてない。なのに、アーシュアルトは容赦なく近づいてくる。

自ら先頭に立ち、軍を指揮するアーシュアルト。そんな彼の姿が眩しかった。

麗しい黒髪。意志の強そうな黒曜石の瞳が前を見据えている。

でも、右の瞳は眼帯で隠れていて——ああ、駄目だ。もつと。もつと、彼の姿を目に焼き付けたいのに。

カツチリと嵌められた自爆の首輪に、魔力が吸い取られていく。

呼吸が、できない。苦しい。嫌だ。死にたくない。

死なせたくない。

——アーシュアルトと曰が合つた。

私が転がされていることに気づいたのか、真っ直ぐにこちらを見つめている。

きっと私の向こう側に待ち受けるイッジレリア軍とぶつかるつもりで速度を上げているのだろう。

あの勢いで踏み潰されたら助かるはずがない。

青毛の馬が目の前に迫る。

その後の記憶は、ない。

第一章 目覚めは、敵国王子の腕の中で

私は爪弾き者だ。

この世に生まれて二十一年。結婚適齢期になつても相手など誰もいなかつた。

王女といつても、しょせん第七王女だ。イッジレリア国の國主（火宿り）には数えるのも面倒なほどに側妃がいて、王子・王女もごまんといる。そもそも、王女という身分にさほど価値はない。第七王女ともなれば、政略結婚の駒にすらならない。

その上、私には王族の血が一滴も流れていないので。養子として王族に迎え入れられただけ。

血族は溢れかえっており、これ以上増えても意味はない。なのに、こんな私がどうして王女となつたのか。それは、持つて生まれた祝福のせいだった。

この世界を創造した光と闇の大神は、四柱の女神を娶っている。

水を司る青の女神、風を司る緑の女神、地を司る黄の女神、そして火を司る赤の女神の四柱だ。

それぞれの女神が四つの大属性を調整し、世のバランスを保つてているのだと言われている。

女神たちは、時として人に強い祝福を与える。

祝福は魔力に宿る。魔力とは人が生きるために必要不可欠なものだが、時折、女神の祝福を強く与えられた子が生まれる。

特に強い祝福を授かつた子は、髪、あるいは瞳のいずれかに、女神の色彩が如実に顯れる。

そして私、ライラリーネは、瞳と髪の両方に鮮やかな赤の色彩を宿してしまった。

それが、全ての始まり。

イッジレリアは、赤の女神に愛されし地だ。

もともと赤の祝福を持つ子が多く生まれるが、私ほど強い祝福を受けた人間は他に存在しないと

いう。イッジレリア国の端の端、砂漠の小さな村で生まれた村娘であつた私が、イッジレリアを統べるイオネル家に引き取られたのは、それが理由だった。

強大な力を持つからといって、驕りたかぶるようなことはしない。大丈夫。私は弁えていた。

力を利用したいなら、好きに利用すればいい。逆らうつもりなんてない。どうせ、しがない村の出だ。自分の意見が通るはずもないことは知っている。

だつたらせめて、波風を立てることなく、穏やかに生きていきたい。

そのためにも、王家の駒として、^{つが}なく生きる覚悟はあつた。

『王族の言葉に従います』『私は下つ端です』『すべて皆様の言う通りに』——と。

でも、私がこの国の隅っこで穏やかに生きるために、避けては通れぬ問題があつた。

國主へ火宿りの選出方法である。

宗教国家イッジレリア国の「火宿り」は、五年に一度選出される。

國主に選ばれる条件は一つだけ。

『国内で最も強い赤の祝福を授かつてゐる者』

——つまり、私だつた。

ここ二百年、イッジレリア国はイオネル王朝が続いている。

祝福を持つ者の子は、親と同じ祝福に恵まれることが多い。二百年前にイオネル家から國主が選出されて以来、歴代の國主はイオネル家の血族から選ばれてきたのだ。

血によつてではなく力によつて國主が選ばれるはずのイッジレリア国で、イオネル家は王家と称されるほどに力を持ち続けた。そうしてイオネル家が脈々と「火宿り」の座を継いできたところに、私という存在が現れてしまったのだ。イオネル家にとつて、あまりにも大きな誤算と言えよう。

ひとまず私が大人になるまでは、未成年であることを理由に「火宿り」選出は免れたけど——

当然、私が引き取られてからイオネル家は荒れた。

カツシムや彼の母親をはじめとした王族の多くが、私が「火宿り」になるのではと危機感を覚えたらしい。

私自身は「火宿り」になんて興味ないのに。

こんな小娘に、國を束ねられるわけがない。なのに、周囲は私を放つておいてくれなかつた。

だから八年前、対立國であつたノルヴエンへの派遣——言い方を変えると、人質——の話が来た時、私は一も二もなく飛びついた。

国外にしてしまえば、権力争いから逃げられると思つたから。

そこで、アーシュアルトに出会つた。

——ノルヴェンで過ごした期間は四年。

最初の一年は、アーシュアルトのことをほぼ認識せずに暮らしていた。

魔力が強すぎて王族にされた私と対照的に、彼は魔力を持たない王子だつた。

青き色彩に溢れるノルヴェン王族のなかで唯一、真っ黒な見た目のアーシュアルト王子。

彼は、きっと私のことを嫌っているのだろうと思っていた。いつもなにかを訴えるような視線を感じていたし、その割に話しかけてくるわけでもない。

とにかく気まずくて、会話せずにすむ距離を保っていたはずなのに——

一年が経つた頃だろうか。もともと軍部へ身を置いていた彼が、なぜか私の護衛に志願したのは、最初は驚いたけれども、彼はごく真剣な瞳で、私の専属護衛を買って出たのだ。

生真面目な彼に敵意はないようだつた。

戸惑いながらも彼を受け入れ、三年。

会話はなくとも、彼の隣が心地よく感じる程度の関係になれたと、思っていた。

——あの日のことは、今でも忘れられない。

「ライラリーネ！」

名前を呼ばれて突き飛ばされた。

麗らかな午後のことだつた。

——命を狙われた私の代わりに、彼は右目の光を失つた。

ふわりと、意識が浮上した。

空気が違う。そう思った。

ううん。鼻腔の奥には、いまだにあの乾いた土の匂いが残つている。

数多の騎馬が巻き起こす土埃。私はあの大群に巻き込まれ、首輪の暴走によつて死んだはず。

——じゃあ、ここはどこだろう。

身体のどこも痛くはない。手首足首を拘束していた枷^{かせ}は外されている。

自爆の首輪だけが、今もぎつしりと首に巻きついていた。

「ん……」

パチリと目を開けた。

周囲は薄暗く、すでに昼ではなさそうだ。知らない建物の中、ふわふわのベッドの上に寝かされている。

「気がついたのか！」

ぼんやりしていたところに、誰かの声が聞こえた。

焦つたようなテノール。その声はどこか懐かしく、心地よく響く。

(この声……?)

記憶の引き出しから取り出すよりも、視界にその誰かが映りこむほうが早かつた。

ダンツ！ とベッドに手をつき、こちらの顔を覗き込んでくる男性がいる。

考案の読めない真っ黒な片眸に、右目を覆う眼帯。漆黒の髪はランプの光に照らされ、艶めいて

見える。身につけていた鎧は外しているのか、今はドレスシャツの上に黒のコートを纏っているわけだけれど――

(え？ なに？ どういうこと？)

状況がなに一つ理解できずに口をパクパクと開け閉めする。

ただ、一つだけ、はつきりわざることがあった。

「アーシュアルト、殿下……？」

私はなぜか敵国の王子アーシュアルトに抱き込まれ、ベッドの上で眠っていたらしい。

「…………つ！」

と思ったら、次の瞬間。彼の目が見開かれた。

「ひつ!?」

凄まじい殺気。それを隠す気もないのか、だだ漏れすぎて、一気に私の目が覚める。

いや、殺気を向けられるのは当然だ。彼は敵国の王子なのだから。

(すごく、久しぶりだけど……)

再会を喜ぶような状況ではない。

私は自爆の首輪によつて、彼と彼が率いる軍を巻き込もうとしていた。その首輪は今も私の首に巻きついたまま。

今の私は、イツジレリアの兵器なのだ。

過去の関係など考慮してもらえるわけがない。軍人である彼が私を警戒するのは当然のこと。

「えっと、あの、その、これは……」

刺激を与えないよう、首輪にそつと触れる。

自ら外すことは不可能だ。強引に外そうとしたら、すぐにでも爆発するはず。

全身からいろんな汗が噴き出した。私は身を硬直させることができず、息を呑む。

どうすればいい。どうすれば、ここから逃げられる？

昔とは違う。きっと私は、アーシュアルトによく思われていない。

今は眼帯に隠れた彼の右目は、私が奪ったと言つても過言ではないのだ。彼は私を恨んでいるはず。

となると、この後待つているのは尋問だろう。

どうやつたかはわからないけれど、彼は私を戦場で捕獲した。私のことを知り尽くしている彼のことだから、なんらかの形で利用するつもり――ということか。

(逃げ道は、ない……?)

いやいや、落ちつけ。ライラリーネ・イオネル。まずは冷静になつて、周囲の状況を確認しろ。(逃げなきや)

状況がよろしくないことだけはわかる。周囲を確認しようとした時、ふと気がついた。

そういえば自分は、着替えさせられているようだ、と。

もう何日も牢に閉じ込められた末の、戦場への遺棄だった。全身ひどい臭いがしてたし、肌も薄汚れていたはずだ。

それが今はどうだろう。綺麗に清められ、さらに白いネグリジェを着せられている。首には変わらず自爆の首輪がついているのが恐ろしいが、それよりも、だ。

(あれ……?)

今、私はなにを着ているのだろうか。

(さらさら、してる……?)

なんとも言えない違和感がある。

ネグリジェはシンプルなデザインだけど、妙に手触りがいい。

というか、このきめ細かな布地、極上の絹ではないだろうか。とてもではないが、尋問する相手に着せるようなものではない。

(どういうこと……?)

自己でも着たことがないような高級品であることは間違いない。悲しいかな、私は爪弾き者の名ばかり王女だったもので、贅沢とは無縁だったのだ。

(っていうか、ここはどこ？ 牢、じゃないみたいだけど)

シンプルな石造りの部屋ではあるけれど、このふかふかなベッド。大きな窓たつてあるし、牢であるはずがない。

シーツも絹ではないだろうか。この肌触り、どう考へても一級品だ。

(暖炉に火がついてるってことは、イッジレリアですらない?)

赤の女神の祝福が強すぎるイッジレリアは灼熱の大地が広がっている。近年は雨季ですら雨が降

ることがほとんどなく、深刻な問題となつていてるくらいだ。暖炉なんてあるはずがない。
それに、暖炉に火が灯ついていてもこの肌寒さ。

(ということは、ノルヴエン王国内?)

ノルヴエン王国といえば、青の女神に愛されすぎた冬の大地だ。

灼熱の地イッジレリアから国境を越えて北へ行くと、夏から冬に変わるがごとく凍土に変わる。
気を失っている間に、国境を越えて運ばれたというのか。

「私、助かって……ひつ!」

混乱したまま再度アーシュアルトに目を向けると、彼の纏う殺気が突き刺さつ。
大きな声が出そうになるのをぐつと堪えていると、彼の手が伸びてくる。

「あ、あああ、あの、なにを……?」

長い指だ。剣ダコができるゴツゴツとした手。それが躊躇^{ちゅうちょ}するように宙を搔き、やがて私の頬に
触れた。

(な、なに!? なんなの……?)

でも――

その指先が、わずかに震えている。静かな片眸が私を捉え、ジッと見つめたまま。
もともと寡黙な性格なのは知つてゐるけれど、正直、なにか言つてほしい。

「あの、殿下……?」

焦れる気持ちで彼を呼ぶと、アーシュアルトはますます表情を険しくした。

(ヒイイイ！)

毎日のように顔を合わせていた人質時代とは違うのだ。久しぶりに見ると、この強面、結構怖い。何年も会わぬうちに、随分と雰囲気が変わった。

彼が右目を失ったあの事件の後、彼と会つたことはなかつた。でもその後、線の細かつた彼がすっかり様変わりしたとは聞いていた。

今や、黒の辺境王子。イッジレリア国からこのノルヴェン王国を守る守護神とも呼ばれる防衛の要だ。

真っ黒な髪に同じ色の瞳。どの女神の祝福も授かっていない稀有な存在。

生きとし生けるものは、ごくわずかでも必ず魔力を宿している。にもかかわらず彼は、それを持たない唯一の人間だ。率直に言えば、どうやつて生きているのか謎なくらいだつた。

イッジレリアとノルヴェン、両方の国の王族全部集めても、魔法を使えない人間はただ一人。このアーシュアルトだけだ。

そんな彼は、これまで魔法なしでイッジレリアの進軍を止めてきた。

とんでもない制約を撥ねのけ、ノルヴェンにこの人ありと武勇を轟かせたのだ。

(すっかり武闘派王子の呼び名にふさわしい風貌になつちやつて)

ニコリくらいすればいいのに、表情筋は死滅しているらしい。

なによりも、目が。目が怖いのだ。

黒く、なにを考えているかわからない瞳。もはや暗殺者の目ではないだろうか。敵国の王女絶対

殺す、の誓いを宿しているのではないだろうか。

もどもと長身の上、しなやかな筋肉を纏つた美丈夫ではあるけれど、それよりも殺氣が恐ろしい、が先に来る。彼の元来の顔の美しさを愛てる余裕なんて、今の私にはない。

(自爆は免れたとしても、拷問で情報を引き出されて処刑、の流れよね、これ)

だらだらだら、と汗が流れ続ける。

借りてきた猫よりも従順に、私はカツチコチに固まつたまま、審判の時を待つた。

「君は――」

アーシュアルトの声が響く。

身体がぶるりと震えた。一体、なにを言い渡されるのか。緊張でますます体が強張る。

「君は俺が保護した。以後、君は俺のものだ。わかるな？」

「は？」という声は、かすれて空気に溶けてしまつた。

わかるな、と言わてもわからない。予想しなかつた言葉を聞かされて、一瞬思考が止まる。

ただ、保護という言葉が聞こえたことで、彼が自分を助けてくれた事実だけは理解した。

(人質として、ってことかな？ うん。そう、だね……?)

わからないなりに必死でこくこくと頷くと、黒い片眸がほの暗く光つた。

ならば、と短く口にした後、しばしの間が空き、彼は決意したように切り出した。

「君には俺の妃になつてもらう。今、この時からだ」

「え？」

思いがけなすぎて、すぐに頭に入つてこなかつた。

いや。だつて。——彼はなんと言つた？

(きさ、き……?)

馬鹿みたいに口を開けたままアーシュアルトを見つめ返すが、彼は険しい顔をさらに厳しくするばかり。

ただ、次の瞬間。彼の影で視界が暗くなつたかと思うと、唇に熱いものが落ちてきた。

「んん……っ!?」

ガブリと噛みつくように唇を塞がれる。

驚いて唇を閉ざすよりも、彼が舌をねじ込むほうが早かつた。歯列をなぞつて爛るよう^{なぶる}に舌を絡められる。

「んっ、んんっ、ン——っ!!」

息苦しくてバンバンと彼の胸を叩いたけれど、鍛えられた身体はビクともしなかつた。

むしろ抵抗する私に仕置きをせんとばかりに、ますます強く唇を吸う。

角度を変えたわずかな隙に息を吸おうとして、口を開く。すると溜まつていた唾液がドロリとこぼれ落ち、頬を汚していくた。

呼吸すらできず、涙目になる。頭がぼーっとしそうになつたところで、ようやくわずかに唇が離

れた。

「つ、こんな。……私、はじめて、なのに」

「奇遇だな」

アーシュアルトは感情の読めない瞳でこちらを睨みつけつつ、言葉を紡ぐ。

「俺もだ」

「は?」

ぽかんと口を開けたのも束の間、すぐに再び唇を奪われる。

頭がまつたく回らない。

なぜ? どうして? と疑問が浮かぶものの、それ以上の思考ができない。

蹂躪という言葉がふさわしいほど口腔内を隅々まで犯され、息も絶え絶えになつた。

アーシュアルト、殿下、これは……」

「アーシュだ」

「なにを」

言つているのか。目を丸にする私に対し、彼は真剣に言つてのけた。

「君の夫となる男だ。アーシュと呼べ」

夫。

(え? いや。いやいやいやいやいや……)

待て待て待てと、首を横に振る。

だつて私は敵国の人間で、平民出身の末端王女。今や祖国にも切り捨てられ、娶つたところで意味なんてない。

しかもこの首には自爆の首輪が嵌められているのだ。いつこれが発動するのかわからないのに、留め置く理由なんてない。むしろこの首輪が発動する前に殺してしまうべきなのに。

「待つてください！」

意味が、よく

頭がまともに働かなくて躊躇していると、アーシュアルトの表情はますます険しくなった。かと

思うと、ガッと顔を寄せ、額をくっつけてくる。

「危ないです！ これ、自爆の首輪——」

「大事ない」

「いや、そんなわけな……あつ」

彼の大きな手がするすると下へ這つていく。やがて、しゅるりとネグリジェのリボンを解かかる。

前をリボンで結ばただけの衣装は、あつという間に脱がされてしまった。

部屋の中は暖かくしてあつたけれども、心許なくて、手が宙を搔く。

一方のアーシュアルトは、私の胸に直接触れた。

自分で言うのもなんだけど、そう自慢できるような大きさではない。恥ずかしくて逃げようとしたが、ガツチリと覆いかぶさられ、身体が固定されてしままならない。

指の腹で頂きを撫でられると、恐怖で背筋がゾクゾクと粟立つ。乳首を摘まれた刺激で、無意識に身体が仰け反った。

「ずいぶんと瘦せているな」

「それは……つ」

仕方がないことだ。王女ではあつたけれど、後ろ盾はない。むしろ煙たがられていたせいで、慎ましい生活しかさせてもらえなかつた。他の兄姉たちに目をつけられまいと、贅沢しないようにしていたという理由もある。

アーシュアルトが力を込めたら私の身体なんて簡単に折れてしまいそうだ。

私がビクッと震えると、アーシュアルトは不機嫌そうにギュッと眉根を寄せた。

これから彼がなにをしようとしているのか、わからないはずがない。

名実共に妃に、つまり強引に処女を奪うつもりなのだ。

イオネル王家が私を養子にして取りこもうとしたのと同じ。私ではなく、この赤の祝福が欲しいだけなのだろうけど。

（ここまでする……！？）

私はいい。どうせ死ぬはずだつた身だ。それを助けたアーシュアルトになにをされようと、抗えるものではない。

——でも。

（こんなの、アーシュアルト殿下は望んでない、でしよう……？）

彼は目的のため、国のために、望まぬ行為をしようとしているのだ。

今だつて、脱がせてみたら肉付きの悪い魅力のない女だつたから、がっかりしたのだろう。

「殿下、いい、です。無理にしなくても、私は……っ」

正直なところ、イッジレリア国のことなど知ったことではない。

私はあの国に捨てられたのだ。

だから、ノルヴェン王国が私を取りこもうとするのに抵抗するつもりはない。

これでも人生三十一年、長いものには巻かれるの事なけれ主義でやつてきた。その長いものがイッジレリアからノルヴェンに替わるだけ。むしろイッジレリアなんてこっちからお断りだ。

こうなつた以上、ノルヴェン側に鞍替えする心つもりはある。

「あなたの役に、んん……っ」

わざわざこんな行為をする必要なんてない。そう伝えたいのに、言い終える前に唇を塞がれた。彼は険しい表情のまま、手を止めることはない。ネグリジェを全て剥ぎ取ると、私の小ぶりな胸を揉みしだいた。

「あっ、んう……や」

申し訳なくて、泣きたくなる。

感じたくないのに、身体の芯に熱が灯るのがわかつた。

アーシュアルトの唇が徐々に下へ移動していく。首にも、胸にも、彼は力いっぱい吸いつき、印を残していった。

「あ、まつ、こんな……殿下っ」

痕をつけるなど、なんの意味もない行為だ。なのに、どうして？

居たたまれなくてイヤイヤと首を振るけれど、彼が動きを止めてくれることはなかつた。いつの間にか彼の頭が、私の腰の辺りにある。

(まさか、これって)

腿を両手でガツチリと押さえ込まれた。股を開くように持ち上げられる。

ひんやりした空気が秘所に触れたのも束の間、ぬめりを帯びた生温かいなにかが、そこに押し当てられた。

「つ、待つて！ 駄目……っ」

抵抗しても、無駄だつた。

先ほどまで私の身体の至るところに押し当てられていた唇が、問答無用に私の下の口を喰らははんだ。

にゅる、と生温かい舌が花芽を舐めとつたかと思うと、ナカに侵入してくる。ベロリと入り口付近を往復し、彼はわざと音を立てながら吸いはじめた。

(あっ、これ、ヤバ……っ)

さつきまでのキスの感触とはまるで違う。

直接的な刺激が恐ろしくてつい逃げそうになつた腰をガツチリと掴まれ、容赦なく吸い上げられる。下半身から一気に快楽が駆け上がり、身体がぶるぶると震えた。

「あ、あ……っ！」

快感と共に魔力がブワッとこみ上げてくる。

この感覚、駄目だ。絶対に駄目。だって、今の私は自爆の首輪を嵌めている。この首輪は嵌められた者の魔力に反応する仕組みになつていてるはず。

つまり、うつかり私が魔力を放出したが最後、大爆発を引き起こす。

(まずい)

このままでは、アーシュアルトもろとあるの世行ぎだ。

いや、被害が私とアーシュアルトだけで済んだら御の字。私の魔力が根こそぎ注がれたら、この建物ごと破壊してしまつてもおかしくない。

「ああっ、殿下、やめて……っ」

「アーシュだ」

「つ、殿下、首輪が……っ！」

どうしてやめてくれないのだろう。

(嘘でしょ？ アーシュアルトは私の首輪がなんなのか、わかつていないので？)

いや、いくら魔力がなくとも、彼は優秀な王族だ。知らないはずがない。

自分はいい。もう死んだような身だ。でも、アーシュアルトは絶対に巻き込みたくない。

快樂から逃げようと身体を強張らせるものの、下ではアーシュアルトが容赦ない愛撫を続けていて、いよいよ御しきれなくなつた。

「駄目です。魔力が、首輪に反応して……このままじゃ、爆発……っ」「気にするな」

「しますっ！」

どうして冷静でいられるのか。イヤイヤと首を横に振るが、彼は止まるつもりはないらしい。口で嬲^{なぶ}られるのと同時に指で花芽を摘まれ、今まで我慢していたものが一気に決壊した。

「ああああ——っ！」

ぶわあっ、と、身体の奥から一気に魔力が吹き出す。

首輪の作用か、強引に魔力を外に放出させられる。抑え込んでいた努力も虚しく、制御できないほどの魔力が噴き出した。

(駄目……！)

どれだけ止めようと踏ん張つても、首輪を媒体にズルズルと引き出されていく感触。赤の祝福が、身体から抜けていく。どうしようもなく、絶望が意識を塗りつぶしていく。

せめてアーシュアルトだけでも助けなければ。

一縷の望みをかけて、私は彼を突き飛ばそうとした。

でも、彼にガツチリ腰を掴まれて、離れるとは叶わない。

魔力と共に快樂が駆け巡り、ぐるんと胎内を一巡りした。

もう駄目だ——身体が強張る。

——でも。

恐れていた事態にはならなかつた。ふわりと身体が軽くなる。

(あれ……?)

おかしい。

自分でも、なにが起ったのか、ちつともわからない。
放出されたはずの魔力が、綺麗さっぱり消えていた。

「アーシュアルト、殿下……?」

どういう理屈なのかはわからない。放たれた私の魔力は、どこかへ霧散したようだ。

「あ……」

身体中の熱が一気に引いて、心地よさだけが残る。その感覚に身を委ねながら、私はぼんやりと目を開いた。

(無事、だつた……?)

少なくとも、アーシュアルトを巻き込むことはなかつた。
しかし安心している暇はない。ホツとしたのも束の間、先ほどから弄られていた場所に今度は彼の長い指が突っ込まれた。

「あつ、ああつ」

「濡れているな」

「んんっ、待つて……」

一度達したらしい身体は隅々までゾツとするほど敏感になつていた。ギュッと己の身体を抱き締めると、アーシュアルトの眼光が鋭くなる。

「力を抜け」

容赦なく指を出し入れされ、奥から蜜が溢れはじめる。それを潤滑油代わりに、彼は指を二本に増やした。

にゅちつ、にゅちつ、と淫らな音が響き渡る。それがますます私の肌を火照^{ほて}らせ、同時に不安定な気持ちにさせた。なにかにしがみつきたくて、あてもなく両手を伸ばす。

「ん。俺を掴んでいろ」

「はつ、ああつ……」

「そうだ。もつと強く掴んでも構わない」

「殿下……っ」

アーシュアルトと彼は繰り返す。

その主張を聞く余裕なんてなかつた。ただただ膣内でバラバラに動く彼の指に翻弄されるばかりだ。

「少し、柔らかくなつてきたな」「ふ、うつ……」

ふるふると睫毛が震える。アーシュアルトのキスが降つてくる。

もう彼のなすがままだつた。少しでも寄る辺がほしくて縋るように身体を擦りつけると、彼が驚いたように目を見張る。

瞬間、ガンッと彼の表情が強張って、乱暴なキスをされた。

身体が熱い。蕩けそうなほどに。甘い蜜が腿を流れ落ち、シーツを汚す。

そろそろか、と彼が漏らした言葉を拾い、私は目を細めた。

いつの間にか彼はコートを脱ぎ捨て、シャツのボタンも外していた。

ガツチリした筋肉に覆われた彼の胸元が見える。軍人らしい、逞しい彼自身に釘付けになつてしまふ。

(しなやかで、綺麗——)

私どもは根底から身体のつくりが違うらしい。

無意識のうちにしがみつくと、くつり、と喉の奥で笑うような音が聞こえた。

「いい。どこでもいいから、俺に触れていろ」

「ん……」

「できればしっかり腕を回しておけ。幾ばくか痛むはずだ」

とろけたままの瞳で見ると、彼は力チャ力チャとベルトを外している。

(え……)

間もなくズボンをくつろげた先に現れたモノを目の当たりにして、私は息を呑んだ。

あまりに太くて逞しい猛り。しなやかな彼の肢体に、あんなものが隠されていただなんて。

(待つて？ 待つて待つて？)

血管がボコボコと浮き出た、あまりに生々しい彼の屹立。凶悪な、という表現がピッタリなほどに禍々しく、長く反り返ったそれに言葉を失う。

無理だ。挿入るはずがない。

火照^{ほて}った意識に、一気に冷水が浴びせられたような感覚だ。

けれど私の腰が引けるよりも早く、彼はその猛りを蜜口に押し当てた。ぐつと力を込められてからは一瞬だつた。

圧倒的な質量を持つたそれが、一息に私を穿つ。

「——っ！」

奥の奥まで一気に突き立てられた。

どすん、という深い衝撃。呼吸することすらできず、身体がのけ反る。無意識に彼の背中に腕を回し、爪を突き立てた。

「つ、つ、つ……！」

破瓜の痛みで、言葉にならない声が漏れた。彼も彼で苦しそうに息を吐きながらも、猛りを抜こうとはしない。

あまりの熱に溺^{おぼ}れそうになり、意識を繋ぎ止めるため腕に力を込める。彼も同じように強く抱き締め返してくれたから、縛るようにその逞しい胸元に顔を埋めた。

「あ、……は、あ……っ」

奥まで突き立てられてしまらく。ようやく呼吸が整つてきた。

「うつ、うう……っ」

ひどい。

こんなに深く、重いものを。

「殿下……」
「女房たうだのは
問答無用であんなどんでもないモノを受け入れさせられるなんて、

力いっぱい均

力いっぱい抱きついて、彼の胸に顔を擦り寄せる。

こんなにも痛くて苦しい思いをしたのだから、彼の身体で安心する権利はあるはずだ。

少しでも痛みを誇魔化するための行為なのに、なぜか私の中に突き込まれた彼の熱枕が

と存感を増していく。ナ

「詩つ、殿下……！」

訴えるように呼びか

「少し、動かす」

えつ

動かす

ががに従つて、はじめて制止に間に合わない

「あつ、んんんつ!?

「ライラ……！」

するするするつ、と抜かれ、すぐにまた、ばつんつ！ という重たい衝撃が走る。

彼のモノが大きすぎるせいか、少し動いただけでも脛壁が強く擦られ、身体が跳ねる。少しでも気をゆるめたら意識が弾け飛んでしまいそうで、私は必死に彼に縋りついた。「もっと。もっとだ。強く抱んでいる」

「腰をもつと押しつけて。そう、それでいい」

締まるな。そう呟いた彼は、苦しそうに息を吐きながら抽送を始める。

バツツ、バツツと容赦なく肉がぶつかる音が部屋中に響いた。

身体の中を異物が行き来するのかわかる。そのたびに私も意味を伴わなし声を漏らした

眉根が寄る。彼の瞳には真剣さが強く滲み、より深く私を穿つた。

彼のモノが私のナカの一点を擦る。より強い快楽をもたらす場所を見つけたらしい。彼はねちっこい、くらべ、そぞろを重複してくる。

快樂と共に、魔力がかき混ぜられ、身体ば

駄目。このままだと、また魔力が放出されてしまう。

「あつ、ああつ。や、そこつ……」

「んつ、……きもち、いつ……」

自然とこぼれ落ちた言葉のせいか、アーシュアルトは満足そうに口の端を上げた。

（あ、笑つて、る……）

アーシュアルトが、満足そうに。

それは初めて見る表情で、心の奥底がジワリと熱くなる。

この行為に合意したつもりはない。でも、彼の満足そうな顔を見るのは嫌ではなかった。

「ライラ……くつ、ライラっ」

彼が苦しそうに息を吐きながら、何度も何度も私の名前を呼ぶ。

その深い響きの中に、どうしてか甘さを拾ってしまい、肚の奥底がづくりと疼いた。

応える代わりに、私も腕に力を込める。余裕なんてあるはずがなく、ふうふうと息を吐いた。深い。彼の猛りが奥の奥に押し当たるたび、意識が飛びそうになる。

身体がばらばらになりそうなほど深く穿たれ、いよいよ視界が瞬いた。

「ああ……っ！」

「くつ、イクッ……！」

肚の奥に脈動を感じると同時に、私の意識も流される。

魔力の制御なんてできるはずがない。

流されるままに、全てを放出し――

――放出した先から、アーシュアルトに吸収されていった。

（きもち、いい……）

知らなかつた。魔力を放出するのが、こんなに気持ちがいいなんて。身体が蕩けて、このまま溶け合つてしまいそうだ。

私はうつとりしながら、汗ばむ身体を彼に押しつけていた。

彼もまた汗を滲ませながら、私にもたれかかるようにしてベッドに倒れこんだ。もちろん、繋がつたまま。

「はつ、はあつ……はあ、はあつ」

「マズイな。よすぎる」

そう言いながら、彼は私を両手で抱き込み、体勢をひっくり返した。

アーシュアルトの筋肉をベッドに、今度は私のほうが覆い被さるかたちになる。それが妙に心地よくて、安心するように身体を預けてしまった。

多分、本能のままだつたのだと思う。彼の胸元に鼻をすり寄せ、すんすんと匂いを嗅いでいた。深くて、ほろ苦いような大人の香りがする。これが、雄という生き物なのだろう。ギュッと抱き締められるのが心地よくて、気がつけば彼の胸にキスを落としていて。

（――あれ？）

後から、自分の意識が追いついてくる。

（私、今、なにを……？）

無自覚にとんでもないことをしていないか。と気づいても、もう遅い。アーシュアルトがビクツと震え、私のナカで熱を取り戻していく。

「あ、あの、殿下……？」

これはまずい。どう考へても私が持たない。——それなのに。

アーシュアルトは気まずそうに視線を逸らしつつ、はつきりと告げる。

「君が、煽るからだ」

「あお——!?」

そんなつもりはない！　と言い返そうとしたのに、下から突き上げられた衝撃で言葉にならなかつた。

「あつ!?」

今度は最初から全開だった。

ガツツ、ガツツと容赦なく突き上げられ、呼吸ができない。

一度達した身体は敏感になつていて、あつという間にぶるぶると震えだす。

ナ力に出された彼の精液と破瓜の血とが混じり合い、溢れ落ちていく。お互いの腿をぐちゃぐちやに汚しながら、それでもアーシュアルトは止まる気などないらしい。

突き上げられながら一回。

彼の膝の上に乗せられて一回。

体力と精神の限界で崩れ落ち、覚えているのはそこまで。

おそらくその後も、彼は何度も私を蹂躪じゅうりんした。

結果、私はベッドの上の住人となつた。

疲労困憊と筋肉痛と高熱で、合計四日。

——ただ、馬鹿みたいに魔力放出を繰り返した副産物か。次に目覚めた時には首に嵌められていた首輪が粉々に壊れてしまつっていた。

もちろん、爆発などただの一度も起こらなかつた。



崩れ落ちた女性を、腕の中に抱き込んだ。

(——軽い)

王族でありながら、十分な食事を与えられなかつたのだろう。力を入れたら壊れてしまいそうなほど細い身体を抱き締め、アーシュアルトは胸の奥で疼く感情にぐすぐずに揺さぶられていた。

どうどう手に入れた。自分の運命を変えてくれた彼女を。

この日をどれほど夢見たことか。

アーシュアルトは、ノルヴェン王族の異端児だ。魔力を持たず、青の色彩をどこにも宿していない自分が、たゞいまねな祝福をその身に宿す彼女を正規の方法で娶ることなど不可能だつた。

それでも諦めきれず、国境となるこの辺境領でイッジレリア国を見張り続け、どうとう——この手に幸運が舞い込んだ。

(ああ、ライラ！　ライラリーネ・イオネル)

その名を心の中で呼ぶだけで、胸が熱くなる。

あまりにも、素晴らしい時間だった。

湧き出る愛情の赴くまま、アーシュアルトは彼女の髪を梳かす。少し毛先の傷んだ細い髪。ふわふわとクセがある髪をくるくると指に巻きつける。そうして束を掬い上げ、薄い唇でキスを落とした。

本当に、どんな色彩でもライラは美しい。

(——まさか魔力放出が、こんな効果までもたらすとは)

ライラリーネ・イオネルといえばイツジレリアの至宝。

髪と瞳の両方に真紅の祝福を宿す、赤の女神の愛し子だ。

しかし自爆の首輪によつて強制的に魔力を引き出されたせいか、はたまたアーシュアルトの特異、体質のせいか——

身体を繋げている最中、彼女がみるみるうちに赤い色彩を失つていったのを、アーシュアルトはこの目で見ていたのだ。

ライラ本人は気づいたどうか。イツジレリアの至宝を象徴する鮮やかな赤は、もうどこにもない。浅い灰色の髪が、わずかに赤みがかかる程度。瞳も、すでに赤ではなかつたはずだ。

長い長い夜を越えて、彼女は女神の祝福を失つた。

——正しくは、アーシュアルトの手によつて奪われたのだろう。

アーシュアルトは、特異体質である。

祝福、と呼びたくないが、アーシュアルトにもこの世界で唯一無二の大神の祝福がある。

王と兄弟たちしか知らない極秘情報だ。アーシュアルトが持つ黒の色彩は大神に授けられたもの。光と闇の大神の、闇の側面を受けられたのだった。

結果。どんな魔力も通じない、『全ての魔法を吸収する』特別な性質がアーシュアルトにはあつた。

といつても吸収するだけで、自分自身が魔力を使えるようになるわけではないのだが。

(かつてはこんな自分を恨みもしたが……)

今は違う。この力のおかげで彼女の命を救い、手に入れられるのだから。

(色彩まで失わせてしまつたのは想定外だが、逆に都合がいい、か)

アーシュアルトはわずかに口の端を上げてから、そつと彼女の頬に手を触れた。

長年——そう、ずっとだ。彼女が人質としてノルヴェン王国にいた時から、ずっと彼女のことを目で追つていた。

貴族にとつて、処女は絶対だ。彼女の初めては確かにアーシュアルトが頂いたのだから、これで誰にも奪われまい。同族に搔つ攫ささらわれないよう、迅速に彼女を抱いた甲斐があつた。ああ、ライラは素晴らしいかった！

(感じるたびに俺の身体にしがみついてきて、そのたびに彼女の中はきゅうきゅう締まる。穿つたびに全身が喜びに震え、俺も負けじと焦らすように擦ると——ああ！ 彼女が潤んだ目で見上げてきて、俺の胸に頬ずりをするんだ。以前よりもずっと大人になつた彼女は、女性らしい色気が滲ん

でいた。俺はまるで吸い寄せられるように夢中になつて——

はあ、と甘い息を吐く。

(ライラリーネ・イオネル。絶対に手が届かないと思つていた彼女が俺のところに落ちてきてくれるなんて。大神は俺の味方をしたのだな。あれほど可憐であれほど力を持つた神子姫を刈り取ろうなど、イッジレリアの連中を全員斬り殺してやりたいくらいだがまあいい。彼女を俺対策として戦場に出してくれたおかげで、彼女も助けられ、俺も彼女を手に入れられた。万事が、俺のために動いているように感じる。ああ、ライラ！　俺の天使!!)

——アーシュアルト・サヴィラ・ノルヴエン。

常に寡黙で怒りを秘めたように強面の彼は、内心では驚くほど雄弁だった。

(俺のライラを——こんなに麗しく健気な女性を冤罪で処刑しようなど。おのれイッジレリア王家。許してなるものか)

イッジレリアで大きな政変があつた。内情はわからないが、先の国主「火宿り」が倒れ、イオネル家の長子カツシム・イオネルが新たに「火宿り」となった。

本来であれば「火宿り」に選ばれるべきはライラ——だが、二百年もの間イオネル家が支配するイッジレリアにおいて、宗教国家としての法など、とっくに形骸化している。

どれだけ女神の祝福に恵まれていようとイオネル家の血族以外の人間が「火宿り」になることはあつてはならない、という反対意見によつて、彼女の即位は難しいとされていた。となると血筋、実力、人気ともバランスのとれた第五王子セイランが最有力候補かと思われていたが、今回の政

変——

(第五王子の不在時を狙つたのだろうな)

カツシムにとつて、本来の「火宿り」の条件を満たすライラと、最有力候補であるセイランは目の上のたんこぶだつたのだろう。そこでセイランが他国へ外交に出ている間にライラを捕らえ、先代「火宿り」を弑逆しやぎやく。その罪をライラに着せ、自らが国主となつた——といったところか。

もどもとイッジレリアはきな臭いところがあつた。政変などいつ起こつてもおかしくなかつたが、よりによつてライラを巻き込んだ。アーシュアルトはそれが許せなかつた。

彼女が自爆の首輪をつけられ、戦場に放り出されたのはある意味、ぎよしうつづ僥倖ぎよしうつづだつたが。

それ以外の手段で処刑されていたら、助けることは叶わなかつた。

想像するだけで腹の底からじす黒い感情が湧き出しそうになり、心の奥にぐつと押し込める。

彼女は助かつたのだ。この腕の中にいる。ライラがライラのまま、アーシュアルトのもとに墮ちてきてくれた。今は、その喜びを噛み締めたい。

先ほどもそうだ。魔力が溢れそうになつた時、彼女は自らの命よりアーシュアルトの身を心配してくれた。

自分を攫ささらつた敵国の王子を相手に、なんといじらしいことか。

(昔から変わっていないな)

彼女は彼女の価値観で生きている。

身分や能力など関係ない——そう主張し、凜と立つ彼女に憧れた。

——八年前。イッジレリア国との国境で睨み合いが始まる前のことだ。

かの国とノルヴェン王国の間では、それぞれ赤の女神の祝福を賜った赤の神子と、青の女神の祝福を賜った青の神子を派遣し合う——言い方を変えれば、人質を交換し合う慣習があった。

しかし、それは必要なことだった。

この世界は火・水・風・土、四つの属性を司る女神によつて支えられている。

女神の祝福は〈火脈〉〈水脈〉〈地脈〉〈風脈〉と呼ばれる四つの〈命脈〉によって、広大な大地の隅々まで巡るものだ。

だが、その力は均等に行きわたるわけではない。赤の女神に愛されたイッジレリアなら〈火脈〉、青の女神に愛されたノルヴェンならば〈水脈〉といったように、それぞれの女神から祝福を受けた属性が強く作用する。

放つておけばイッジレリアは砂漠化が進み、ノルヴェンは凍土が広がつてしまふ。

それを防ぐためには相反する属性を活性化させ、〈命脈〉のバランスを整えなければならない。

〈命脈〉に干渉できるのは、強い祝福を持つ者のみ。その者は神子と呼ばれ、それぞれの土地の〈命脈〉を整える宿命を持つ。

しかし、神子自身も土地の影響を受けて生まれてくる。赤の神子が生まれるのはイッジレリア、青の神子はノルヴェンに生まれることがほとんどだ。

自國の人間だけでは、国は続かない。どれほど敵対していても、この世界の人々はなんらかの形

で援助し合わなければ生きしていくことができないのだ。

だから古来より、国の垣根を越えて神子を交換し合う慣習があつた。

そうした理由でイッジレリアからやつてきた赤の神子。それがライラリーネ・イオネルだつた。彼女の名前はよく知つていた。

イッジレリア国の中でも飛び抜けて優秀な、異端の神子姫。

当時わずか十三歳。神子が成人する前に他国へ派遣されることも異例中の異例だ。

抜擢されたと言えば聞こえはいいが、要は国の継承争いから体よく追い出されたのだろう。

そうまでして自國に残したくない娘。彼女の出自は広く知られており、平民出身だと揶揄する者も少なくはなかつた。

当時のアーシュアルトは、彼女を疎ましく思つていた。

同じ王族という立場でありながら、彼女とアーシュアルトはまつたく違う。

王家の血が流れても魔力を持たない役立たずだった自分と、優秀すぎて王家に求められた平民の彼女。

もちろん、その溢れんばかりの才能のせいで危うい立場に立たされていることもわかつていただが、アーシュアルトにとつてライラはあまりに眩しく、近寄りがたい人物だつた。 彼女がノルヴェンに来て一年くらいは、遠巻きに様子を見ているのみだつた。

当時のアーシュアルトはまだ辺境領を任されてもおらず、王都で燐つていた。それなりに武術の才能はあつたから軍人見習いとして当たり障りなく暮らしていたが、それだけだ。最低限の役割を

果たす以上のこととはせず、目立たないように生きていた。

そんな中、どうしても目に入る鮮やかな赤。出くわすたびに、つい目で追つてしまつたのは事実だ。それでも、その頃のアーシュアルトにとつてそれ以上の存在ではなかつた。

彼女と話す気になつたのは、本当にたまたまだ。

ある日、城内を散策していた彼女とばつたり出くわした。

——その日、アーシュアルトはごく簡素な装束しか身につけておらず、一般の兵卒と間違えられてもおかしくないような姿だつた。

普通の貴族の娘なら見なかつたことにしてそそくさと立ち去るか、当たり障りのない挨拶を交わす程度だ。

しかし彼女はアーシュアルトを見て、につこりと微笑んだ。

アーシュアルトは戸惑つた。子供という生き物は——特にそれが姫君ならなおさら——アーシュアルトの顔を見ただけで緊張して震えるか、あるいはどの女神からも祝福を授からなかつた忌まわしい存在だと眉をひそめるかのいずれかだ。

けれどもライラはそんなそぶりを見せず、のほほんとした表情をしていたのだ。

その時の会話は一言一句覚えている。

彼女は今まで会つたどの神子とも違つて、気高くも、儂くも、神々しくもなかつた。

イッジレリアの神子といえばジャラジャラと金で飾り立てたけばけばしい衣装を好む印象があつたが、彼女は違つた。

品がいい、とも少し違う。必要最低限の装飾を施した、地味で質素な赤い神子服がよく似合つていた。

(平民出身の神子姫か……確かにこれは、戸惑う貴族も多いだろう)

神子らしさと貴族らしさと平民らしさ、それが絶妙なバランスで積み上げられた奇妙な子供。王族でありながら王族になりきれなかつたアーシュアルトとも違う、不思議な存在。

ゆえに聞いたのだ。

「どうして君は、その立場に甘んじてている?」

今まで近寄らないようにしてていたはずのアーシュアルトが、突然話しかけてきて驚いたのだろう。彼女はゆつくりと瞬きし、小首を傾げる。どうにも緊張感の足りない様子に、アーシュアルトはより苛立ちを覚えた。

「火宿りになろうと思えばなれる。その才を持ちながら、どうして自国で上を目指さないのか、と聞いている」

「ああ」

すると、聞かれ慣れているのか、彼女はさして興味なさそうに答えた。

「イッジレリアにいるより、こうして外に派遣してもらうほうがいいと思つてるんですよ。だつてノルヴェンにいたほうが断然、困つている方の役に立てるでしょう? 赤の祝福を持つ人ならイッジレリアにはいっぱいいますし、いくら強い力があつても私でなきやいけない理由はないですか」

47 処刑されるはずが、目覚めたら敵国の隻眼王子の妾愛に囚われていました

驚くアーシュアルトを尻目に、彼女はさらによぎり続けた。

「適材適所、って言うんですか？——爪弾き者にも、それはそれでふさわしい場所があると思うんですよ」

達観した彼女の目は、遠くを見つめたまま。

その目が、とても美しく見えた。

「だから私は、ノルヴエンに派遣してもらつてよかつたと思ってます。……ほら、こちらだと民と直接お話しできる機会も多いでしよう？ 肩の力を抜けるつていうか、貴族社会にこもつてているよりもずっと向いてるつて思うんです。これはイツジレリアの誰よりも、私に向いたお仕事なのでは？ つて」

ふふふ、と微笑む彼女は、子供と大人、両方の顔を持つっていた。

真っ赤な神子服で美しいカーテシーをしてみせてから、凛と立つ。その姿は平民の身で神子になつた自分を卑下するようにも、その上で誇らしく前を向いているようにも見えた。

アーシュアルトは打ちのめされた。

三歳も年下の娘に、たしなめられたような気がした。

自分にはなんの才もない、ふてくされてばかりの人生だった。立ち向かうことを諦めた者にふさわしい、くだらない一生をただただ消耗して生きるのだと。

軍人になつたのも、自身を鍛えているのも、国を守るために建前だ。アーシュアルトはその道しか選べなかつたからにすぎない。

それをこの娘は、自分の立場を受け入れた上で誇らしく生きていこうとしている。

自分よりも何歩も先——ずつとずつと進んだ場所に、彼女は立つていた。

抱いたのは、憧れに近い感情だったと思う。

それから、アーシュアルトは彼女の動向を気にするようになつた。

大人びているとはいえ彼女はまだ子供で、しかもイツジレリアの連中にいいように使われ続けていた。そんな立場を理解した上で、自分らしく生きようとする——その手助けができればと思ったのだ。

その後、危うい立場だった彼女の護衛に志願した。

王族自ら護衛をすることは、と意見する声もあったが、アーシュアルトは王族でも魔力を持たない半端者。王位継承権を持たぬ身であるため、反対意見は次第に消えていった。

そうして彼女の影となり、三年——

——命を狙われた彼女の身代わりになり、アーシュアルトは右目を失つた。

長い回想を打ち切り、アーシュアルトは失われた己の右目にそつと触れた。

この眼が最後に捉えたのが彼女の姿だったのは僥倖だ。^{ぎやくこう}この目を失うだけで、自分の生き甲斐を護ることができたのだ。むしろ誇つていい。

その天使が今、アーシュアルトの寝所で眠つていて。

奇跡だ。魔力を——青の色彩を一切持たずに生まれたアーシュアルトにとつて、ただ一つ、望み

立ち読みサンプル はここまで

のままに手に入れられた宝物。

（これからは、とびっきり幸せにしてやろう）

毎日この子の部屋に花を飾ろう。

外に出るのも好きなはずだ。だから、たくさん一人で出かけよう。

彼女が美味しいと言うものをいくらでも取り寄せよう。

この娘はいろんなものを失いすぎた。これからはたくさん与えられるべきなのだ。それを、アーラ

シュアルト自身が与えてやりたい。彼女の笑顔が見たい。

最初は、憧れだつた。

しかし彼女の辛い境遇と、それを笑い飛ばしてみせる強い心。そして会えなかつた数年間が、

アーシュアルトの中に眠つていた気持ちを育んだ。

その想いは、彼女を見守るうちにゆっくりと形を変えていた。

——そう！

（俺は、彼女を愛している！）

半端者の自分であるが、彼女を想う気持ちは本物だ。

昨夜は募りに募らせた気持ちを爆発させてしまつたが、これからだ。ライラのためにしてやりたい

ことがたくさんある。

熱くなる胸を抑えて、今後のことを考える。

いつまでも浮かれていてはいけない。彼女の処女は頂いたが、アーシュアルトは魔力を持たない

辺境の王子だ。功績だけは誰にも負けぬように挙げているが、それだけでは足りない。

ライラは自分の価値に無頓着だが、赤の女神の祝福を持った神子姫がこの国でどれほど渴望され

ているか。

ぼやぼやしていたら、他の王子や貴族たちに取られてもおかしくないのだ。

（——髪と瞳の色が変わったのは運がよかつた）

自爆の首輪が壊れるほど根こそぎ魔力を放出させたことで、彼女の持つ色彩は大きく変化した。赤目赤髪のまままでいるより、他の男たちの目を逸らすことができる。だが、これもいつまでもつか。

（待つてくれライラ。俺は絶対に、君を手に入れる）

そう決意し、そそくさと寝室を後にする。

向かった先、こちらの様子をハラハラと窺つていた臣下のユスファと目が合つた。

ユスファはクリーム色の髪に明るい若草色の瞳を持つた青年だ。アーシュアルトの一つ上で、乳兄弟として共に育つた。

この辺境領までついてきてアーシュアルトを支えてくれる、言わば右腕だ。

そんな信頼の厚い男に、アーシュアルトははつきり告げた。

「ユスファ」

「はい」

「俺は彼女を妃にする」